|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| スライド 1 |  |  |
| スライド 2 |  | ここでは、通常の学級担任と交流及び共同学習を行う特別支援学級の担任との「連携」について説明します。 |
| スライド 3 |  | 交流及び共同学習を進めていく時に通常の学級担任からこんな声が聞かれたことはなかったでしょうか。  「ただ、一緒にいる場をつくり、子供たちの自然な関わりにゆだねている状態だな。」  「特別支援学級の先生や支援員の先生に任せっきりだったな。でも、何を大切に進めていけばいいのだろうか。」  等戸惑いながら交流及び共同学習に取り組む先生方の姿を見られたことはなかったでしょうか。 |
| スライド 4 |  | 交流及び共同学習とはどのような意義やねらいがあるのでしょうか。「交流及び共同学習」とは、障害がある子供と障害がない子供が共に学ぶ場であり、障害の有無に関わらず全ての子供にとって経験を広め、社会性を養い、豊かな人間性を育てる上で大きな意義がある。また、多様性を尊重する心を育むことができるとされています。 |
| スライド 5 |  | 交流及び共同学習の土台となる「ねらい」とは、どのようなものでしょうか。交流及び共同学習のねらいには「相互のふれ合いを通じて豊かな人間性をはぐくむことを目的とした交流の側面と教科等のねらいの達成を目的とした共同学習の側面があります。「共に学ぶ」という視点から指導・支援を考えたときに、両側面のねらいを明確にしていくことが大切です。 |
| スライド 6 |  | 交流及び共同学習を行う際に担任によって取り組み状況や理解が異なると活動が一過性になる可能性があります。より充実したものにするためには校長のリーダーシップの下、学校全体で組織的・計画的に進めていくことが大切です。まずは、交流及び共同学習の意義やねらい、内容等を学校全体で共有し、方向性をそろえて、土台づくりをしていくことが必要です。そして、連携して取り組むためには、時間割編成や実施するためのルール等を共有し、校内体制づくりを行う必要があります。では、具体的にはどのように実践していけばよいのでしょうか。今回は、特別支援学級担任と通常の学級担任との「連携」の視点から実践を紹介します。 |
| スライド 7 |  | これから紹介する実践事例は、自閉症・情緒障害特別支援学級と通常の学級との第２学年の図画工作科の交流及び共同学習です。  「交流及び共同学習」では、計画的に実施するためには、主に「学習前」「学習中」「学習後」の連携を大切にしています。では、この事例ではどのような「連携」がなされているのでしょうか。 |
| スライド 8 |  | この実践では、まず通常の学級担任と特別支援学級担任との間で学習前に図画工作で取り組む教材、取り扱う素材や製作テーマを確認していました。また、素材を扱う上での実態や道具、材料の確認、そして製作後に「お店屋さん」を模して子供同士の関わりが持てるような展開の確認をすることで、特別支援学級在籍児童の交流学習のねらいや共同学習のねらいを設定できるようにしていました。 |
| スライド 9 |  | そして「学習前」に、通常の学級の子供と特別支援学級在籍の子供を理解し、それぞれの「交流学習のねらい」「共同学習のねらい」を十分に把握しておくことが必要です。このねらいについては、通常の学級担任も特別支援学級担任もお互いに把握しておくことが、充実した交流及び共同学習につながります。 |
| スライド 10 |  | また、学習前には、ねらいの確認だけではなく、授業の前までに特別支援学級担任が、「今日の図画工作の授業では、この粘土で食べ物を作る予定です。どんな物を作ってみたいかな。また、作った物を使ってお店やさんごっこをするよ。」と授業の具体的な見通しが持てるように話をしていました。そのことで「僕は、お寿司が好きだから、お寿司を作ってみたいな。お寿司を作るから、僕はお寿司屋さんになるよ。」という発言が見られました。この事前の関わりにより、子供が見通しを持てるようにするだけでなく、子供の反応や実態に応じて交流及び共同学習の参加の仕方を調整しようとしていました。このように交流及び共同学習では、学習前の「連携」が大変重要になります。 |
| スライド 11 |  | こちらは、交流及び共同学習の１場面です。粘土でお寿司を作った特別支援学級の児童がお寿司屋さんになり、通常の学級の友達に紹介しています。言葉のやりとりがあまり得意でない特別支援学級在籍の児童と通常の学級の児童との関わりは、どのようにして生まれたのでしょうか。このやりとりが始まる前に、通常の学級担任は、特別支援学級担任との連携により自分から声をかけることが難しいという児童の実態やねらいを把握していたので、「みんな、ちょっとすごくおいしそうなお寿司ができてるよ。」と学級全体に向けて声をかけていたのです。つまり、意図的な声かけにより、子供同士の関わりを促していたのです。ここが、「学習前」の連携が生きた場面です。 |
| スライド 12 |  | また、学習後には、交流学習、共同学習のねらいの達成ができたのかを通常の学級担任と特別支援学級担任との間で共有を行うことも大切です。例えば、交流学習のねらいが達成されたかを共有する場面では、通常の学級の担任が、「お店屋さんの場面で友達がどのように関わるのかをよく見ていて、自分がお店屋さんになる時に参考にする姿が見られていました。」と特別支援学級在籍児童の交流の様子や「きっかけがあれば、特別支援学級の児童と自然に関わることができていました。」と通常の学級の児童の様子を特別支援学級担任に伝えていました。特別支援学級担任は、「友達と関わるきっかけを教師が作れば、やり取りする力を発揮できました。良い関わりができる場面設定を担任の先生と次時も考えることが大切ですね。」と交流のねらいが達成できたのかについて確認をしています。また、この学習後のねらいの達成度や子供の様子によっては、特別支援学級の子供の参加の仕方を調整することも視野に学習を進めていくことも大切です。 |
| スライド 13 |  | そして、交流及び共同学習を充実したものにするには、学習を行う通常の学級が受容的で親和的なかかわりのできる集団であることが基盤になります。それには、第２章でも説明したように通常の学級において多様性を認め合える集団作りを進めていく必要があります。そのことにより、特別支援学級在籍の子供だけではなく、通常の学級の子供たちも含めて生活や学習がしやすくなると考えられます。また、交流及び共同学習を行うことで、多様性を認め合う学級集団が高まるチャンスになるともいえそうです。「連携」をキーワードにすべての子供たちが過ごしやすい学級集団づくりを構築していくことが大変重要です。 |